



研究論文 (Articles)

認知症高齢者の歌との関わりによる 語りの表出と自己の生成¹⁾

——音楽療法後の歌に関する語りから——

山下 世史佳・市村 暁子・松本 健義

(兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科・仁和会ももの里病院・上越教育大学大学院)

Expression of narratives and self-generated attitude of elderly with dementia in
involvement with singing: Narratives about singing after music therapy

YAMASHITA Yoshika, ICHIMURA Kyoko and MATSUMOTO Takeyoshi

(Doctoral program of the Joint Graduate School in Science of School Education,

Hyogo University of Teacher Education・Jinwakai Momonosato Hospital

・ Graduate School in Joetsu University of Education)

The Purpose of this study is to elucidate the feelings and emotions of the elderly participants with dementia through their narratives how they have interacted with songs since their childhood and their singing activities, and unstructured interviews about songs was conducted on participants of seven elderly with dementia who reside in nursing facilities. The contents of their narratives were categorized by similar topics they talked about. The feelings, emotions and self-generated attitude of the participants which were expressed from their conversations or narratives were considered. As a result, various topics about songs elicited diverse narratives from participants. When a participant talked in a group, not being alone with an interviewer, they expressed narratives in which they tried to send their feelings to other participants and understand those participants as well. Interaction occurred among the participant, the other participants and the interviewer, and it exposed the interviewee's hidden true feelings, and those were expressed in words. Cooperative narratives between a participant and other participants were expressed, the fact that they exist here in this moment and each participant's life became synchronized and all participants found the value of themselves who have made their life's journey and joy of being here, and generate their true, inner selves.

本研究は、認知症者に対して歌に関するインタビューを実施し、自身の幼少期からの歌との関わり、歌唱活動についての語りによる認知症者の気持ちや感情の表出と自己の生成を明らかにすることを目的とする。高齢者施設に入居中の対象者である認知症者7名に対して、歌に関する非構造化面接を行い、発話内容を類似の内容毎に分類し、会話／語りから表出した対象者の気持ちや感情を考察した。その結果、歌の話題から、対象者の多様な語りを引き出すことができ、個人よりも他者と共に語ることによって、他者に自身の思いを伝え、他者を分かろうとするような語りが表出した。さらには、個人、他者、インタビュアーとの間に相互行為が起り、個人とインタビュアー間の単独インタビューでは表出し得なかったインタビュアーの気持ちを生起し、これが言葉となって表出したと考えられる。つまり、個人と他者との協働的語りによって、今ここにいうという事実と個々の生とが同期し、個々人が、生きてきたことの自己の価値や喜びを見出し、自己を生成していた。

Key Words : Dementia, Elderly, Singing activities, Narrative, Emotions

キーワード：認知症、高齢者、歌唱活動、語り、感情

1) 当論文は兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科博士論文の一部となる。

1. 緒言

1. 認知症高齢者の現状と支援

我が国では、高齢化に伴い、現在、65歳以上の4人に1人が認知症とその予備軍（厚生労働省，2014）とされる。2025年には認知症者（本研究では、以下、認知症高齢者を一貫して「認知症者」と表記する）は700万人に達する（内閣府，2016）と予測され、家族や知り合いの中に一人は認知症者がいる程に、身近で誰でもなり得るものとなっている。特に、介護保険施設入居者の認知症罹患率の割合は、介護老人福祉施設で96.7%、介護老人保健施設で95.6%と9割を超え、高い現状にある（厚生労働省，2017）。現在、認知症者を含む高齢者を地域全体でサポートしていくために、2014年施行の医療介護総合確保推進法で、団塊の世代が75歳以上となる2025年を目標とする「地域包括ケアシステム」構築の実現が提唱され（厚生労働省，2014）、認知症サポーター²⁾は全国で養成されている。

認知症は、全ての記憶を一度に失うのではない。軽度の場合、近時記憶、短期記憶等の記憶力の低下は見られても（出井，2015）、長期記憶は保持されていることが多い。筆者の行う音楽療法の参加者も、幼少期や青年期に覚えた曲であれば暗譜で歌えたり、歌から当時を思い出したりするが、それは長期記憶が保持、再生されるからである。また、認知症者は、自己を喪失するのではなく、「中心的な観点においては自己を維持している」（Käll，2015）との見解があり、このことは認知症者のストレングスとなり、認知症者を支援する上でも注目すべき点と考える。

認知症者を含んだ高齢者への支援方法で筆者が基盤とするのは、「その人らしさ（personhood）」を大切にする、Tom Kidwoodによって医学モデルに基づき提唱された概念の「パーソンセンタードケア（person-centered care）」である。「その人らしさ」とは、「関係や社会的存在の文脈の中で、他人からひとりの人間に与えられる立場や地位である。それ

は、人として認めること、尊重、信頼を意味している」（Kidwood，2005）。援助者は認知症に関する知識を深めると共に、認知症者が「その人らしさ」を維持し高められるように、目の前にいるその人の能力や価値観、好み、スピリチュアリティ、行動障害等からのメッセージを理解する必要がある（Kidwood，2005）。援助者や認知症者と関わる全ての者は、認知症者と接する時間がごく短時間であっても、このような支援を意識して行うことが必要である。

2. 先行研究

認知症者の語りの研究において、認知症者の見当識障害にかかわる現象の捉え直し（田中・大橋，2016）では、他者との関係性に基づくディスコース分析により話題を共有した語りや、他者への配慮や状況への気づきといった能力の捉え直しが可能となることが示された。本研究の対象者のような、介護老人施設で暮らす認知症者の日常での経験（服部・安藤・中里・池田・青木，2011）では、認知症者の施設での生活や施設への思いが明らかとなり、認知症者が自分らしさを見いだす支援の必要性が示唆されている。認知症者が語る生活上の困難な体験と思いを認知症者の語りから示した研究（加藤・高山・沼本，2014）では、自分の変化への試行錯誤、自覚があるがゆえの悲嘆、自覚に基づく困難への適応等の思いを抽出している。緒方（2009）の認知症者の生きてきた道や生活体験を回想描画した研究では、回想描画法に基づき、認知症者の生活体験を、語りや絵画表現で導き出している。

認知症者の感情の表出の研究（白井・藤原・宮口・宮前，2005）では、重度認知症者の笑顔の表出の誘発要因について探り、認知症者への関心、尊重、コミュニケーションの重要性を指摘している。認知症者の感情表出とケアの研究（小松，2013）では、認知症者における生活の質の維持、向上を目指すケアの方向性が示されている。これらは、認知症の当事者の気持ちから読み取れることを深く掘り下げるより、介護者や支援者の視点でのケアに重きを置いている。

認知症者への音楽療法に関する海外の研究では、認知症者への長期音楽療法の効果についての課題に

2) 厚生労働省によると、認知症サポーターには、認知症に対する正しい知識と理解を持ち、地域で認知症の人やその家族に対してできる範囲で手助けする役割がある。

関する研究（Koger, Chapin, Brotons, 1999）、好みの曲の聴取による不安軽減の効果（Sung, Chang, Lee, 2010）に関する研究等がある。これらは、音楽が認知症者の心身に良好な変化をもたらすことを示唆している。日本の音楽療法研究では、認知症者に対しての音楽療法の効果や、有効性を指摘する研究（阿部・佐藤・田部井・藤田・中野・木田・富本, 2015）（高田・岩永, 2014）（小原・前田・中澤, 2013）（佐々木・内田・村田, 2013）が多い。音楽療法に関する研究では、事例研究が中核となり、認知症者の自己や感情の表出について語りを通して研究しているものは少ない。

認知症者と自己についての研究では、認知症者の自己効力感を取り上げた研究（畑野・筒井, 2006）の他、施設入所高齢者の自己意識の研究（沖中, 2006）での、施設入所高齢者が過去の自分と今を比較し、「輝いていた」「輝かない」時のように自己意識を抱きながら生きる意味を考えていることや、ケア提供者についての援助の必要性が唱えられている。在宅で老いを生きる要介護高齢者の自己意識の研究（沖中, 2011）では、在宅高齢者が仲間と交流しながら老いに立ち向かう等の自己の安定が示唆されている。他者と共に在る高齢者の表現する姿の研究（戸田・谷本・正木, 2017）では、認知症者の自己表出を描出することで、多面的な対象理解の検討に活用できること、回想法による認知症者の感情表出を試みた研究（太田・井上, 2009）では、回想法により、他者への関心や意欲が想起され、不安や抑うつ等の症状改善が検出されている。しかし、本研究のように、認知症者自身の歌や音楽に関する語りから、認知症者の自己価値への気づきや自己の生成という、本質的な全人的変化に関する考察をした研究は、あまり例がない。

3. 認知症者の歌に関する語りを取り上げる意義

筆者は現在、高齢者の歌唱活動による変化等を研究しながら、7年前より複数の高齢者施設で音楽療法を実践している。日ごろ無表情で口数も少ない参加者の表情、動き、発言数が、音楽療法によって変化することを日々体感している。認知症者でもその変化は顕著であり、無口な認知症者が、音楽療法後

の参加者同士や音楽療法士と参加者との会話において、歌が流行した時代のことや気持ちを語り出していた。認知症者には一般に、失語や表情の硬さ、気持ちの表出の難しさが見られるが、音楽療法後に気持ちや感情の表出が起り得るとしたら、それはなぜだろうか。音楽は、非言語コミュニケーションであり、多くを語らずとも独自性や個性を表出するための手段となり得る。また、歌は、音楽の要素に加え、その時代、心情、情景、状況を表す歌詞を伴うため、歌うことで、歌が流行した時代、当時の自身の生き方、人との関わり、環境等を顧みることができる。従って、歌に関する語りを認知症者から引き出すことが、認知症者の自己表出に繋がるのではなかろうか。そこで本研究では、入居施設で日頃音楽療法に参加している認知症者に対象を絞り、音楽療法後の語りにおける感情表出に着目する。歌に関する感情を語りで表出することは、認知症者が、人と繋がり、自分らしさや生きがいを感じ、新オレンジプラン³⁾にあるように「よりよく生きていく」きっかけを得る過程となる。

また、林（2012）は「滋養的環境にある認知症高齢者の生きる世界は、認知症高齢者の主体的な語りや行為によって現在・未来という「時間」に向かって自らの居場所「空間」を創造する世界であり、それは、老い衰えゆく自己の豊かな生への営みを可能にしている」として、認知症者の生きる世界に着目している。認知症者が自身の覚えていることを他者に繰り返し語るのは、聴き手がいるという対話が成立する状況下で自己の体験を呼び戻す喜びであり、自己の生の価値を再確認していると考えられる。つまり、認知症者が語るということは、たとえ同じ内容の繰り返しであっても、当事者にとっては新たな状況下における自己の表出であり、自己の生の価値を再確認できたことの喜びとなり、自己を生成していくこととなる。そして、他者との関わりの中で認知症者が自己を表出及び生成していくことは、認知症者の記憶障害等の中核症状や、不安や抑うつ等の

3) 2015年1月27日に厚生労働省が公表した「認知症施策推進総合戦略－認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて－」の通称。
http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12300000-Roukenkyoku/nop1-2_3.pdf (2018.1.12 採取)

BPSD (Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia) に対して、良好な影響をもたらす可能性を含み (太田・井上, 2009), QOL (Quality Of Life) を向上させ、その人らしさを取り戻すことに繋がると考える。従って、本研究では、認知症者の歌との関わりによる自己表出と語りの関係及び意義について考察を行う。

4. 自己の生成の定義

本研究で取り上げる自己とは、Mead (1934) の言う「他者との関わりからの反応による自己」や、Neisser (1993) の、主として記憶によって担われる自己である「時間的拡張自己」、他者と関わりをもっている最中に直接知覚される自己である「対人的自己」である (梶田・溝上, 2012)。この「時間的拡張自己」とは「個人が知っており、語り、想起し、未来に映し出すような、その個人のライフストーリー」(榎本, 1998) である。本研究での自己は、語りを通して想起される自己や、他者によって知る自己である。認知症者の自己は、中核症状やBPSDによって失われるかに見えるが、決してそうではない。認知症の程度が進行するにつれ、言葉が失われることはあろうが、自己は常に存在する。人は、日々を過ごしていく中で、新たな自己を創り出している。人は、新たに生成した自己を会得する。認知症者も同様である。本研究では、認知症者の記憶にある自己、他者との関わりにおける自己から、今ある自己やこれからの自己を再確認する流れを、自己の生成と定義する。

5. 目的

本研究では、音楽療法後に認知症者に対して歌に関するインタビューを実施し、自身の幼少期からの歌との関わりや歌唱活動についての語りによる認知症者の気持ちや感情と自己の生成を明らかにすることを目的とする。

II. 研究方法

1. 対象者

筆者が3年前より隔週1回60分の音楽療法を実

施 (参加人数20名前後/男:女=3:7) している有料老人ホームW (以下Wと表記) と、7年前より毎週1回60分の音楽療法を実施 (参加人数30~40名/男:女=1:4) している介護付有料老人ホームY (以下Yと表記) に入居中の85歳~95歳 (2017年のインタビュー当時) の認知症者計7名 (男性3名E, F, G, 女性4名A, B, C, D) である。音楽療法参加歴は1~7年で、対象者らの出席率は95%と非常に高い。加えて、7名と筆者が、音楽療法の時間前後に多くの会話を重ね、これまでに十分なラポールが築けていたことが、7名の選出理由である。研究期間は、Aのみ2016年10月、B~Gは2017年7月である。7名は認知症の診断を受けているが、自身の考えを言葉に置き換えることが可能であったので、7名の対象者に対して、各施設の食堂において、音楽療法終了後に30分間インタビュー調査を実施した。インタビューの詳細を表1に示す。対象者に関する事前情報から、7名の認知症の程度は、厚生労働省の要介護認定調査員マニュアルの「認知症高齢者の日常生活自立度」、ADL (Activities of Daily Living) は、厚生労働省の要介護認定調査員マニュアルの「障害高齢者の日常生活自立度 (寝たきり度)」に準ずる。その他の病歴や知能評価スケール結果等は、プライバシー保護のためとの施設側の判断により情報開示されていない。年齢、性別、ADL、特徴は、対象者及び家族、施設職員からの事前情報及び、音楽療法参加時の様子等である。

2. データ収集方法

幼少期の歌との関わりや、そこから展開する語りを引き出すため、非構造化面接を実施した。W入居者4名の内2名へは単独インタビュー、他2名へはグループインタビューを実施した。Y入居者3名へはグループインタビューを実施した。グループインタビューを行う利点は、「何も言うことがないと思っている人が、他のメンバーの発言を聴いて、自分の意見を言い出せること」(無藤・やまだ・南・麻生・サトウ, 2004) であり、集団力学がある (Frey & Fontana, 1991) ことである。一方、欠点としては、人がいることであえて語られないことがある (東村, 2012) ことである。ここでは、単独とグループの2

表 1. インタビューの詳細

対象者	A	B	C	D	E	F	G
年齢・性別	85歳女性	91歳女性	87歳女性	87歳女性	95歳男性	90歳男性	87歳男性
施設	W	W	W	Y→W	W	W	W
音楽療法参加歴	3年	3年	2年 2年前に入居	7年 2017年1月YからWへ移動	1年 1年前に入居	3年 3年前に入居	2年半 2年半前に入居
認知症の程度	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
音楽療法前や中での認知症とみられる症状	指摘がないと同じ事や話を繰り返す。歌詞カードはどこを歌っているか分からず、ページを頻繁に探す。作話あり。	同じ話を繰り返す。日頃は無表情な時が多い。トイレに行ったかを頻繁に気にする。	失語きみで、質問しても返答がないことがある。物の名前が出ない。いつも不安な様子。作話あり。	日時、物の名前、居る場所等、見当識が大幅に低下している。鬱気味でもある。作話あり。	同じ話を繰り返す。1度歌った歌を10分後には歌っていないかのようにリクエストする。	頻繁に宙を見つめている。歌詞カードはどこを歌っているか分からなくなる。	物や人の名前を著しく忘れる。同じ話を繰り返す。
ADL	A 見守りなく歩行は可能だがトイレ介助あり。	A 歩行補助器使用、身の回りのことは自立。	A 杖を使用した歩行が可能、トイレは自立。	A~B 歩行補助器使用から2017年7月車椅子使用を開始。	A 歩行補助器使用、身の回りのことは自立。	A 歩行補助器使用だが歩行困難。動きは遅い。	B 車椅子利用者。呂律が回らない。
特徴	街中の厳粛な家庭でクリスチャンとして育った。現在、その実家は観光名所となっている。自身の生まれ育った場所の話を何度もする。子供は2人。以前は他者に対し攻撃的であったが、漢方薬で症状を緩和できている。家族の来訪はほとんどない。音楽療法時には、人よりも旋律の途切れる部分を長く伸ばしたり、体を揺らしたり、筆者の発言に逐一反応を示す等、熱心に参加しており、大きな声で歌う。	関東地方出身。小学校卒業後、女学校に進学。夫と早くに死別。子供はいない。映画音楽と『あさみの歌』が好きである。長年、洋裁の先生として働き、バッグ等の小物から友人の娘のウェディングドレスまで作成していた。以前、自身が作成した着物を着た写真を見せるために筆者を部屋に招き、1時間半程話したこともある程話好きで、滑舌は良い。はっきりとした性格で、善し悪し等の意思を明確に他者へ伝えることができる。	穏やかでゆったりとした性格をしているが、はっきりと意思表示をする。女学校を出た後、主婦をしながら女学校時代にした合唱を何年か続けた。所属していた合唱団は、大会に出る程の実力をもっていった。『浜辺の歌』等きれいな旋律の唱歌が好きで、いつも大きな声で歌う。音楽療法終了後もすぐには部屋に戻らず、毎回筆者と会話をし、あまり自身について語らない。	華道、茶道等の師範の資格を持っている。元自衛隊職員。以前は自慢が多く、プライドが高い印象であったが、最近では自身の頭の衰えを訴えることが多く、口数も減少、表情ももの悲しい様子になり、いつも物愛げな様子である。施設職員や筆者が何かで手伝うと、必ず感謝の言葉を口にす。音楽は好きで、嬉しそうに表情で歌っている。	主張が強く、自分の思うように周りを動かしたいところがある。リーダーシップがある。満州に10年住んでいた。歌をこよなく愛し、特に民謡を好む。本当は独唱で大勢の前で民謡を披露したいという思いがある。笑顔をやささない。毎回その日の音楽療法の感想と次回のを筆者に言う。	愛用の歌本を常に持ち、若い頃は映画が好きで、映画館に通い話していた。時折自分の世界に入っている。折り紙細工に凝る。施設内に季節毎に趣向を凝らした作品を飾っている。音楽療法終了後は、声高らかにその日のお気に入りの歌を歌い続ける。	以前は話好きだったが、現在は病気の関係でうまく言葉を書き出すことができず、それを気にして口数が少ない。元大学教授という肩書を持ち、人の名前をすぐに覚える。笑顔にはリハビリ目的だけでなく、筆者に会うために参加しているとの本人談。筆者を部屋に招き、自身の論文を見せてくれた。
実施方法	個別	個別	グループ（2人）		グループ（3人）		

通りのインタビュー方法を取り入れることにより、語りの拡がりを試みた。

認知症者の語りには、中核症状やBPSD等の主症状、行動、心理面の個人内要因から、時間、場所、人等の交錯や、繰り返し（田中，2014）といった特徴が見られる。インタビュアーは語り内で、それらの特徴が見られた際には、否定せず、肯定的、共感的に相槌を打ち、認知症者のその時の気持ちや感情をそのまま引き出すようにした。インタビュアーが認知症者の語り内容についての誤りを指摘すると、認知症者の不安が高まり、語りの流れが止まる可能性があるからである。

3. 分析方法

各インタビュー時間は音楽療法後30分程度とし、質問者（インタビュアー：筆者）と対象者（研究協力者7名）との相互行為によって生まれる語りをICレコーダーに録音した。分析方法としては、音声記録から逐語録を作成し、発話内容を類似の内容毎に分類し、会話／語りから表出した対象者の気持ちや感情を考察した。

分析過程では、ライフストーリー・インタビューの分析に用いられるように、対象者の語りの内容、構造、意味に着目し、「各対象者の語りの特徴をまとめるとともに、対象者の比較をくり返し行い、それらの共通性や差異の詳細を明らかにしていく」（無藤・やまだ・南・麻生・サトウ，2004）方法で分析

を進めた。また、語りの記述についての要約と考察は、共著者との共通の見解を示すことで、インタビューに直接携わった筆者の一人称的分析のみではなく多角的な分析を行うことを試みている。

4. 倫理的配慮

各対象者、その家族、施設関係者へは、研究の趣旨、方法、内容を口頭で説明し、研究への協力及び、インタビュー内容全てのICレコーダーへの録音の承諾を得た。また、研究結果は各対象者及びその家族、施設関係者へ報告した。固有名称はイニシャル表記、個人を特定できる箇所は削除した。インタビューは各7名の体調や状態に配慮し、細心の注意を払って実施した。

Ⅲ. 各対象者の語りと考察

1. 語りの記述方法

本研究では、歌に関する語りが見られる内容部分を取り上げ、考察する。語りの記述は、ICレコーダーの発話記録をそのまま記述している。語りの記述、語り内容の要約、考察の順に記載する。語りの記述方法は表2の通りである。

表2. 語りの記述方法

A, B, C, D, E, F, G	対象者（7名）の表記
MT (Music Therapist の略)	インタビュアー（筆者）の質問や相槌
① ~⑭①	会話文一文ごとの通し番号 要約や考察と対応
()	前後の意味合いによる筆者の補足
(中略)	語りの脱線部分

表3. 語りの記述1：幼少期の歌と姉との関わり

A：①みんなとこうして歌を一緒に歌えるのが、本当に嬉しい。②私は元気じゃったらここにおりませんから。③私はS（出身地名）ですからね、山の上の方へ行ったりしました。
 MT：④Aさんは、歌はいつからお好きですか。A：⑤子供の時から、4歳から。⑥それは、姉が勉強が1番で、勉強する時に私をへりにおらして（傍に居させて）自分がちょっと気に入らなければ、「あんたが悪い」と怒られていた。
 MT：⑦怒られながらも好きで歌われていたのですか。A：⑧そう。⑨それでみんな習いに行かれてたから。⑩2階へ。⑪あれはなんとか言う、先生の名前は忘れまして。⑫有名な先生だった。
 MT：⑬どんな音楽ですか。A：⑭ドローあー忘れたけどーははは。⑮いわゆる音楽。⑯それで、その間に少しでも一なあ。⑰いろいろな家がありますなあ。⑱私は、音楽があると聞いて、嬉しいなあと思うた。⑲それで、戦争が始まったでしょう。⑳だいたい、1時間の中に、5人ぐらいが選ばれる。㉑そこへ私はまあ、選ばれた㉒歌を歌ってくださいと。㉓姉が1番だから、私が間違ったりしたら怒るので、お姉ちゃんの顔はこんなに（目を見開いて覗き込む仕草）見てた。
 MT：㉔それで、お姉ちゃんの真似をして、上手に歌って。A：㉕さあ、向こうはどう思っているか知らないけど。

2. Aの語り

要約1：Aは音楽療法の他の参加者と共に歌を歌うことに、喜びを感じている（①）。4歳から歌が好きだった（⑤⑦⑧）。Aには姉がいた。姉は勉強等がよくできてAに対して厳しいところがあった（⑥）。戦時中でありながら、当時住んでいた場所の2階に来ていた音楽の先生に歌を教えてもらった（⑪⑫）。ある時、その先生から「歌を歌って下さい」と5名程選ばれ、その中にAが入っていた。優等生の姉に怒られないかと心配しながら、間違わないように歌った（⑱⑲⑳㉑㉒㉓）。

考察1

Aは歌を好きになった年齢を、「4歳から」と明言している（⑤）。このことから、幼児期より歌への関心が強かったため、現在も当時の記憶が鮮明であることが窺われる。姉との関係については、「「あんたが悪い」と怒られていた」ように、厳しい姉にいつ怒られるかという緊張感を持ちながらも、優等生の姉を誇りに思う気持ちも含まれているように見える（⑥）。子供時代に受けた音楽の授業は印象に残り、多数の中から選ばれて歌を歌った語りには、選ばれたことへの自負と優等生だった姉と肩を並べることができたような誇らしさや、インタビュアーにも認めてもらいたいという気持ちがあったと考えられる（⑳）。Aにとって姉の存在は大きく、いつまでも姉には及ばないという気持ちを抱えながらも、Aが自ら姉について語ったということから、離れ離れになっている今でも姉に怒られたことを思い出し（⑥⑳㉑）、「お姉ちゃんの真似をして～」とあるように姉を慕う気持ちが強いことが分かる（⑥㉑㉒㉓）。Aの語りは、インタビュアーからの問いかけによって、歌を歌えていることの喜び（①）から幼少期の歌や姉との関わりへと転換したが、歌の話題から幼少期の思

表 4. 語りの記述 2：今歌えることへの感謝

A: [26]だから、私はここ（施設）へ音楽が来た時に、私は生まれ変わったなあとと思った。[27]で、あの一毎日ね、あの一お手伝いに、その時はまあ有名な Z（私的施設名）という場所で。
 MT: [28]今も有名です。A: [29]ああ、そう。[30]あれが、お医者さんが次々へ変わられるんじゃ。[31]というのが、病気になったりするまではおられる。[32]だから、私はここで歌を歌うというのは嬉しくて嬉しくて。[33]（笑）それで、歌ってみたら下手で。
 MT: [34]声はいつもよく伸ばされているもんね。[35]よくこちらまで聞こえてくる。A: [36]ほんとい。[37]ありがとうございます。（中略）
 MT: [38]今はお部屋では歌われんの？A: [39]今は、病院（施設）から全然出ないから。[40]でも、先生（筆者）が来られたして、なんか自分で人間が変わったような。
 MT: [41]ほんとに？[42]そこまで言っておさるの？（中略：家に関すること）A: [43]姉は、なんか東京まではいかないんですけど、えらい人が昔からおられるでしょう？[44]それをしてるし、私なんかは、ちゃんと家（施設）で歌わせてもらうのは当たり前という。
 MT: [45]育ちの中で、そうして歌われてきたのですね。A: [46]うん。[47]だからね、先生が来てくれる時は嬉しくて嬉しくて、それで、1回だけでいいからまた来て！と言いたかったけど、今日初めて言う（笑）。
 MT: [48]ありがとうございます。A: [49]だからねー今日は歌の日と言ったら、もう飛び込んで。
 MT: [50]ありがとうございます。[51]嬉しいわ。[52]歌いたい曲があったら言ってくださいよ。A: [53]ありがとうございます。
 [54]私もはや、90歳だからなあ。
 MT: [55]もうそんな年齢が来られたん。A: [56]時々（職員を指して）お姉ちゃんやあのおじさんも知っているけど、私が先生（筆者）のように上手に歌えばいいのだけど、私はもう忘れてるからなあ。
 MT: [57]また、一緒に歌って下さい。A: [58]こちらこそ。[59]私は、ただそれだけ。[60]だから今日は、この部屋へ行くと言ったら、怒られていたけど、だまーって来た。

表 5. 語りの記述 3：小学生時代に選ばれて独唱

MT: [1]小さい時から独唱ばかり？[2]それはどうして？B: [3]いやー私は声が高いみたいよ。[4]いつも（小学校の）先生が並ばせるでしょ。[5]そしたら私を引き抜くん。[6]私を。[7]だから一人で独唱ばかり。
 MT: [8]どんな曲を歌われた？B: [9]いや子供の頃だから。
 MT: [10]じゃあ、童謡とか？[11]童謡いうてー今日歌ったような曲とか？B: [12]そうね。[13]子供の頃だからね。[14]もうクラスだね。いつも先生が一人抜くのよ。[15]だからね、私が高いみたい。声が。
 MT: [16]あーそしたらいいわね。[17]歌がそれだけ目立つ声だと。B: [18]そ。[19]だからこう、あれがあってもね、いつも一人で独唱させられるの。
 MT: [20]ふーん。[21]それは素晴らしいな。

い出へと繋がり、発せられたと考えられる。

要約 2: A は、現在入居中の施設で音楽療法が始まったことにより、生まれ変わった気持ちを抱いている ([26][40])。施設から外に出ることはできない ([39]) が、代わりに先生（インタビュアー）が来てくれて歌えるのが嬉しい ([32][47])。姉は立派な人になり、A 自身は歌を家（施設）で歌わせてもらえる幸せな環境にいる ([44])。歌の日となると飛んでくる ([47][49])。上手く歌いたい ([56])。今日は（誰かに）怒られたが、歌いに来た ([60])。

考察 2

A は歌えることを心より喜んでいる ([26][32][40][47])。家族の来訪が少なく、自身も外出が自由にならない生活の中 ([39])、「なんか自分で人間が変わったような」と、外部から、大好きな歌を一緒に歌ったり話したりする訪問者（インタビュアー）が来ることやその環境にいられること ([40][44]) がどれほど嬉しいかという喜びの感情が、語りの中に溢れている ([47][49][56][60])。A はその気持ちを、感謝の言葉で筆者に伝えた ([47]) のであろう。

3. B の語り

要約 3: B は歌声が高いと言われたことがある ([3

[15])。小学校時代、並んで歌っていたら先生にいつも引き抜かれ、独唱をさせられた ([5][7][14][19])。

考察 3

B は小学生の頃から目立つ歌声をしており ([17])、「だから一人で独唱ばかり」と、よく独唱させられた記憶 ([4][7][14][19]) と、今回の語りでの、歌声を他者に褒められたという記憶が重なったのか、何度か語っている ([3][17][18])。小学校の先生に褒められたことは B にとって自信となり、それも後押しして、その後も度々人前で独唱している。その経験の積み重ねにより、現在のような、意思を明確に他者に伝えることができる性格が形成されたと考えられる。
要約 4: 前住んでいた施設では、歌いたい曲を歌った ([23])。当時、B は八代亜紀や高峰三枝子の曲を好んで歌った ([28][29][30][31][32][33][34][35])。その施設には『あざみの歌』を好んで歌う男性がおり、歌うように促すと歌ってくれて、それがとても良かった ([50][51][54][55][56])。

考察 4

B は子供の時に褒められたことを記憶しており、独唱することに抵抗感がなかったため、前施設居住時にカラオケの会で活動できたと考えられる。その当時好んで歌った歌手名が出て、歌ったことを思い

表 6. 語りの記述 4：好きな歌や歌手名、思い出の『あざみの歌』

MT: [22]で、U (施設名) の時は歌われたのはどんな歌を歌われたん。B: [23]もう、自由だからね。歌いたいものを歌うんだから。[24]うん。[25]だけど、いろんな人がおったからね。[26]クラブ中にね。[27]でもね、私がうーんと好きだったのはね、八代亜紀。
 MT: [28]あー八代亜紀さんの一『雨の慕情』? B: [29]そうそうそうそう。[30]うん。[31]八代亜紀が好きじゃった。[32]だからいろいろ歌った。[33]昔のよ。
 MT: [34]あーそう。B: [35]高峰三枝子とかね。[36]あのね、T (出身県) に帰ったらね、山の中腹ぐらいね。[37]石碑があるんじゃ。[38]そこに立つとね、高峰三枝子の歌が出る。[39]出てくるん。
 MT: [40]T 県の石碑? [41]前に言われてたの? [42]『あざみの歌』だったかな。B: [43]そう。[44]『あざみの歌』。[45]それ好きな人がおったんじゃ。[46]『あざみの歌』を。[47]で、『あざみの歌』は割合に長いんだよね、[48]間奏が、だけど、すっごくいい。[49]聴いてるとね。[50]で、『あざみの歌』をよく歌ったおじさんがおったん。[51]で、それだけを歌いに来るおじさんがおったん。
 MT: [52]そのカラオケの会に? B: [53]うん。[54]普段はね、来てないんだよ。[55]その『あざみの歌』を歌うおじさんはね、カラオケがある時だけ来る。[56]それでその人がね、「歌ってこない?」と言うと、その歌がすっごく良かった。

表 7. 語りの記述 5：歌う時のコツ

MT: [56]八代亜紀さんの何が好き? [57]声? [58]性格? [59]ふふ。B: [60]声。[61]曲が好き。[62]あの人の・・・なんだったかな。[63]最後の一節をね。[64]あるんじゃ。[65]八代亜紀の。[66]それで女の人、職員さんが話して。[67]Bさんが歌ったら、その一節だけで歌になる」って言われた。[68]だからね。[69]私、裏声使うらしいんじゃ。
 MT: [70]きれいな声ですもんね。B: [71]さあ、どうか知らんよ。(中略)【職員に裏声を褒められたこと】
 MT: [72]今度また聴かせてくださいね。B: [73]ははは。[74]分からないよ。[75]自分では分かんない。[76]好きで歌ってるんだから。
 MT: [77]前ね、こちら辺で歌われよう時も、確かにいい声が開こえてきたわ。B: [78]はあ、もう出ない。[79]声が。
 MT: [80]いや、そんなことないなあ。[81]そんなことない。B: [82]声が出ない。[83]だけどね、静かな声よりもこうね、(腹部に触れ)グッと出した方が、声が出る。

出し ([23] [31] [35])、その歌手の歌声が流れる石碑を見学に行ったことを懐かしむ ([36] [37] [38] [39]) 等、語りながら、歌にまつわるエピソード記憶が次々蘇って来ていたのであろう。それらの思い出は、Bにとって生きる支えとなっており、今までと同じように今後もこのことを語り続けていくと考えられる。また、カラオケの会にいた『あざみの歌』を好んで歌う男性の歌声を「すっごく良かった」と気に入っており、頻繁にその人にリクエストを出して歌ってもらったこと ([56]) を、現在、音楽療法内でこの曲をBが度々リクエストして歌う際にも思い出していると推測できる。Bは、『あざみの歌』がお気に入りの曲となった経緯について、インタビューに当時を懐かしむ気持ちを語ることで、「今の施設でもそれらを歌う機会がほしい」との気持ちを伝えたかったと考えられる。

要約 5: B の歌声について他施設の職員から「一節だけで歌になる」と言われた ([67])。好きで歌っているから自身の声の良さは分からない ([75])。静かな声より、お腹を入れてグッと出した方が、声が出る ([83])。

考察 5

この語りから、子供時代に抱いた自身の歌声への自負心は、他施設で再び褒められたこと ([67]) で確信となり、歌声を褒められることがBにとって自己価値となり、自己肯定感の会得に繋がっている。こ

こでは裏声の話が再び登場し、「自分では分からないよ」と謙遜も含みながら ([71] [74] [75])、さらに声の出し方のコツ ([83]) についても触れている。このことより、生来の歌声に加えて、B自身もさらにうまく歌いたいとの気持ちで努力したことが窺われる。その結果、独唱し、裏声をきれいにさせることは、Bにとって誇りとなっている ([83]) と考えられる。

4. C と D の語り

要約 6: C は子供の時から歌が好き ([1] [2]) で、D はCの歌の上手さを認めている ([7])。D は童謡を昔から歌っている ([13] [14])。子供の時に覚えた曲の中で今思い出せる曲は、C は『浜辺の歌』 ([22]) だが、D は何の曲でも好きである ([24])。インタビュー中にCが『虫のこえ』を自然に口ずさみ ([30] [31] [32])、Dもそれに加わった ([30])。

考察 6

子供の時から歌が好きだったかの問いに、Cは「好きです」と即答した ([2]) が、Dは「困ったな」と答えた ([5])。Dは、童謡について「長いこと (歌っていた)」と答え ([14])、どこで歌ったかは思い出せなくても、歌っていた記憶があるように言っている ([13])。CはDに歌の上手さを褒められて ([32])、その嬉しさからか、子供の時に覚えた曲について、「好きなのはな」と前置きした後 ([19])、『浜辺の歌』の曲名を言わず、歌うことで返答した ([20]) と考えら

表 8. 語りの記述 6：好きな歌

MT: 1 歌は子供の時から好き? D: 2 好きです。
 MT: 3 何が好き? 4 どんな歌が好き? D: 5 困ったな。C: 6 どんな歌でも好き。D: 7 この人うまい。
 MT: 8 童謡とかは? C: 9 え? 10 童謡。11 あー歌うと。
 MT: 12 Dさんは? D: 13 歌ってましたよ。14 長いこと。
 MT: 15 じゃあ、子供の時に覚えた曲で、なんか今思いつく曲がある? C: 16 もっと小さい時?
 MT: 17 いつでもいつでも。18 一番印象に残ったとか。C: 19 好きなのはな。20 あーしーたーはーまーべーをさーまーよーえーばーよーという。
 MT: 21 はいはい。22 『浜辺の歌』だ。23 Dさんは? D: 24 私は何でも好き。
 MT: 25 どんな曲が好き? 26 今 Cさんは『浜辺の歌』じゃったけど、どんなのがある? D: 27 なんでもいくなあ。28 私は。
 MT: 29 じゃあ・・・C: 30 あれまつ虫が一鳴いているーちんちろちろちんちろりん♪(高い声で。Dと筆者も途中から加わる) 31 あれ鈴虫が一鳴きだしたーリンリンリンリンリーニン あーきの夜長を鳴き通すー♪(顔を見合わせて歌う) D: 32 (Cの声に反応して) ええ声じゃ。C: 33 (少し得意げに) あーおもしろいー虫の声ー♪
 MT: 34 グーグー。35 上手い。36 ふーん。37 こういうのを歌われたんな。

表 9. 語りの記述 7：歌った場所と歌ったジャンル

MT: 38 そしたら、今まで歌を歌って、場所はどこでよく歌った? D: 39 場所はもう、ここ(施設)しかないが。
 MT: 40 ここ? 41 ここの前にもどっかで歌ったと思うけど、Dさん、歌はどこで歌った? D: 42 どこで歌ったじゃろう。
 43 家かな。44 子供が上手いんよ。45 子供がみんな。
 MT: 46 Dさんの子供さん? D: 47 うん。
 MT: 48 あーそう。49 Dさんは子供さん何人おられるん? D: 50 3人。51 今仲良しじゃから(Cと手を繋ぐ)
 MT: 52 じゃあCさんはどこで歌われたん? C: 53 女学校の時じゃからなあ。54 女学校を出てからもー・・・(中略)
 MT: 55 ええなあ。56 Dさんは? D: 57 なんでも全部歌うった。
 MT: 58 民謡から何から全部? D: 59 うん。C: 60 私は民謡を歌うたことがない。61 私は。
 MT: 62 民謡はどこで歌うった? D: 63 クラブ。64 ふふふ。65 うちはお母さんがみんな持つとるから。
 MT: 66 クラブ? 67 クラブを持つとったってどういうこと? D: 68 クラブへ入るとるから。
 MT: 69 ああ、民謡クラブに入るとるということか。70 それ、いつ頃の話? D: 71 もっと声が出る時。72 今はもう。73 はは。
 MT: 74 50代ぐらい? D: 75 もっと前。76 若かった。77 30代ぐらいかなあ。C: 78 私は民謡は好きなんじゃけどなあ、民謡は何かな...

れる。Dは子供の時に覚えた曲について、「何でも好き」と答えた(24)。以前のDであれば、具体的な曲名を言うことができたが、認知症の症状が進行し、固有名詞等を直ぐに思い出すことが難しく、このような返答になったのだろう。しかし、固有名詞が出なくても、自身を歌好きと自覚しており、好きな曲は、「何でもいくなあ」(27)と幅広さを思わせる修飾語を付けている。『虫のこえ』は、好きな曲についての話題に乗せて自然発生し(30 31)、Cが歌い出したところへDも加わっている(31)。これらから、幼少期に覚えた歌詞はそのまま記憶に残っていると見える。Cの歌はDやインタビューアとの語りの中で起こり、DもCの歌声によって覚醒し、Cの声に引き寄せられるように歌い出している。C、D、インタビューアの語りの中で、これらが展開されたのが明らかことから、このことは、グループインタビューの効果の表れと考えられる。CとDと一緒に歌える喜びを感じながら顔を見合わせ歌う姿は、最近仲良くなった同級生同士で譜面無しで歌える共通曲を発見できた喜びを分かち合っているように見え、その喜びが高らかで大きな歌声となったのだろう。

要約 7: Dはここ(施設)しか歌う場所がない(39)。

ここに来る前は自宅でDの子供達が歌っていた(44)。3人いる子供は皆歌が上手い(45)。昔は民謡でもどんなジャンルでも全部歌っていた(57 58 59)。民謡は母親が民謡クラブを持っていた関係(65)で、30代の頃には歌っていた(77)。今はCと仲が良い(51)。Cは女学校時代や卒業後も歌っていた(53 54)。民謡は好きだ(78)が、今までに歌ったことはない(60 61)。

考察 7

Dには、近年、音楽療法前中後で、年月日、時間、季節、場所、人物が分からない等、見当識障害の様子が見られるが、今、自身がいる場所でよく歌う(38 39)との自覚があった。また、インタビューアの「Wで歌う前にどこで歌っていたか」(41)の問いから、「自宅にいた頃、3人の子供たちの歌を聴いていた」という発言が表出したと考えられる(44 45)。今は、仲の良いCが隣にいて、子供の話の後に、自ら手を繋いで「今は仲良しじゃから」と言った(51)ことから、Cに家族のような親しみをもっているとも捉えられる。また、母親が民謡クラブを持っていたことから、30代でDも民謡を歌ったように言っている(75 76 77)が、母親に民謡を教わった可能性も考えられる。「もっと声が出る時。今はもう。」

表 10. 語りの記述 8 : C の合唱団での活動

C: [79] (中略: 社交ダンスの話) カラオケには1べん (回) も行ったことないん。
 MT: [80] あら、カラオケ好きなん? C: [81] いやー嫌いなん。D: [82] 好き好きがあるからなあ。[83] でも、いまだに覚えているってことは好きなんだよね。[84] ずっと。
 MT: [85] 子供の時の後に D さんは自衛隊をやってたと言われてたけど、その時も歌った? D: [86] うん。[87] ようけー (沢山) なんやかんや (何でも) 歌った。
 MT: [88] 何やかんや歌った? [89] いろんなのを? D: [90] でも今は、もう駄目じゃな。
 MT: [91] 駄目なことはないよ。[92] 大丈夫。C: [93] 一人で歌うんじゃなくてな。[94] 合唱団。
 MT: [95] それはいつ頃? C: [96] いやーいつも合唱団に。D: [97] プロじゃな。
 MT: [98] 合唱団の、それは社会人合唱団みたいなの? C: [99] いやーそんな有名な合唱団ではねーけど。[100] ちーせー (小さい) の。
 MT: [101] ママさんコーラス? C: [102] そんなんできてねー (ない)。
 MT: [103] じゃあ、その辺の集まった人と歌ったん? D: [104] みな上手。C: [105] その時に、友達と。D: [106] そうよ。[107] 先生 (筆者) に会うのが (筆者の手を取り) いっつも楽しみで楽しみでいけんの。

はは」の発言 ([71][72][73]) は、現在の自身の歌声を情けなく感じているのか、声自体が出ないのを嘆いているのか、複雑な感情を含んだ発言である。C は、「民謡は好きでも歌う機会がなかった」 ([60][61][78]) と答えているが、最近の音楽療法内では民謡も歌っていた。その時の様子から、C の「民謡は何かなあ…」の後に続く言葉は、「難しくくて」「慣れなくて」「歌いづらくて」等ではないかと推測される ([78])。民謡クラブに入っていた母親の歌声が思い出され、それに近づこうと歌っていたかもしれない当時の自身の歌声と、声が出づらくなった現在の自身の声とを比較した ([71][72][73]) ことで、積極的な発言が出てこなかったとも考えられる。

要約 8: C はカラオケが嫌いで一度も行ったことがない ([79])。D は「好き好きがあるから」と C のカラオケが嫌いと言った ([81]) 理由を考え、「いまだに (歌を) 歌えるのは (歌が) 好きだから」と C をフォローした ([83])。C の話ばかりになっていることを気にしたインタビュアーは、D 自身のことを引き出すため、D に自衛隊時代のことを問いかけた ([85])。D は何を歌ったのか記憶が曖昧で、「沢山歌った」と言うに留まった ([90])。そこへ、C がどこで良く歌ったのか思い出し、合唱団のことを話し出した ([93][94])。その合唱団は小さかったが、友達がいいた ([105])。D は合唱団の話と現在の音楽療法の時間と混同しており、「みな上手」と言い ([104])、音楽療法を楽しみにしているとインタビュアーに伝えた ([107])。

考察 8

C は「カラオケは嫌い」と断言した ([81])。D はその発言を受けて、「いまだに (歌を) 覚えているってことは、(歌が) 好きなんだよね」と思いやっ

ている ([82][83][84])。C の、(カラオケは嫌いでも歌は好きだ) という気持ちを代弁しており、C もそれに反論していないことから、D は C の思いを正確に汲み取ったと考えられる。このやりとりの前から C の話が続いていたことを気にしていたインタビュアーは、D に自衛隊時代について尋ねた ([85])。D は、記憶に自信を持っていないのか、「なんやかんや (何でも) 歌った」が「今は、もう駄目じゃな」と言っている ([90])。歌を思い出すのが難しい記憶力の低下への不安感、旋律に沿って歌うことや歌うための声を出すこと等、歌うこと自体の自信の喪失感が見られる。そこに、C の合唱団での活動の話が飛び込み、話題が転換され ([93][94])、D の不安感や喪失感も話題の転換に伴って現在の歌う楽しみへと切り換わったように読み取れる。C は日頃、自ら自身の過去の活動を語ることはないが、同級生で心を許す D の相槌や代弁が後押しし、合唱団のことも自然に語ったと考えられる ([98][99])。C は友達と一緒に合唱団に参加していたと言うが、それは合唱団でできた友達であろう ([105])。D は、合唱団の話題を現在の音楽療法の活動と繋げ、参加者の歌を「皆上手」と言い ([104])、音楽療法を楽しみにしている自身の気持ちをインタビュアーに伝えることができている ([107])。

要約 9: C 自身は定かではないが、歌の国体で県外まで行き、2位の成績を収めた ([110])。D はそれを聞き「途中で辞めず、続けたいといけな」と言った ([122][123])。D は「今もまだ歌を先生 (インタビュアー) から教わっている」と言い、これからも頑張るつもりである ([133])。C はまた好きな歌を思い出したのか、話の隙間を見て『星影のワルツ』『浜千鳥』を歌い出し ([135][137])、D はそれに合わせて体を揺らしていた ([140])。

表 11. 語りの記述 9：詩吟の先生をしていた D と国体へ行った C

C: 108 ダンスが好きじゃけえな。109 第 2 回の国体でなあ。(中略) 110 一応私らのチーム 2 位になったんよ。
 MT: 111 それは何のやつで行ったん。112 その国体へ行かれたん。C: 113 いや、やっぱり歌じゃったと思う。114 確か歌じゃった。
 MT: 115 もしかしたら、歌で行かれたん。D: 116 先生(筆者)のおかげかもしれん。117 全部知っとられるからな。118 歌を。
 MT: (中略) 119 C さんもじゃからいろいろ好きな曲もあって、コーラスに入って歌って。120 だからよく知ってるんじゃな。D: 121 やっぱしねえ。122 途中で投げたらいけん。123 続けにゃあいけん。
 MT: 124 ええこと言うなあ。D: 125 ごめん。126 頑張らましよう。
 MT: 127 いいこと言われましたね。(中略) D: 128 ありがとうございます。129 長いこと。130 うちらあ、まだ教わりようよ。
 MT: 131 何を教えよん? 132 歌の先生? D: 133 私らも頑張らにゃあいけん。134 ありがとうございます。
 C: 135 ♪ふふふーふ♪ (『星影のワルツ』の旋律)
 MT: 136 おー『星影のワルツ』C: 137 (高い声) ♪あーおいーつきーよー (だんだん声が大きくなる。『浜千鳥』の旋律前半歌唱)
 MT: 138 はいはい。139 『浜千鳥』かな。C: 140 ♪なーみのーくーにーからー (笑顔で後半歌唱, D は体を揺らす)

表 12. 語りの記述 10：流行歌と蓄音機

MT: 1 皆さんは歌はいつぐらいからお好きなん。E: 2 いやーそりゃーもう子供の時からな。
 MT: 3 子供の時から? E: 4 大正, 昭和, 言うようなねーあれはものすごい歌が流行ったんじゃ。
 MT: 5 じゃけど, 歌が好きじゃなかったら歌わんじゃろうから。F: 6 あの時は, 学校に音楽なんかない。7 オルガンかなんか, 全然使わなんだけどな。
 MT: 8 それしたら, どうやって覚えたんですか。E: 9 そりゃー流行歌じゃからな。F: 10 流行歌でレコードやなんや買ってきて。E: 11 レコードなあ。F: 12 レコード! 13 今みてーな, あんな小せえ CD みてーな, ああいうのとは違うんよ。14 大きなの買ってきてな。
 MT: 15 それじゃけど, 子供さんの時じゃのうて, 大人になってから? E: 16 いや, 各家庭にな, 蓄音機いうのが皆あったん。F: 17 蓄音機!
 MT: 18 はいはいはい。E: 19 お百姓でもね, 皆んな蓄音機を持っとったん。
 MT: 20 こういうやつじゃ。21 (ジェスチャーで表す) 大きいこういうやつ。E: 22 そう。G: 23 そう。24 ラッパみたいなやつ。25 大きなやつ。26 へへへ。E: 27 せーでな。28 それこそ, トランクみたいな下げれるな。
 MT: 29 それで聞かれようったんじゃ。E: 30 田舎の結局, いらん言うたら蓄音機とかラジオとかいうのがあれじゃったから, ずーっと聴いて大きゅうなっとう。31 それしたら, 大体の流行歌は皆, 子供でも歌えるん。
 MT: 32 あーそうか。

考察 9

C が, 合唱団で県外での歌の大会に出場し, 2 位になったことを自ら語り出したことから, それを誇らしく思っていることが窺われる (109 110)。D は, C の大会出場話を再び現在の音楽療法と混同し, 「先生(インタビュアー)のおかげ」と言った (116)。C はその間違いを気にする様子はなく, 否定もせず, 沈黙していた。C は D とインタビュアーが会話している傍で『星影のワルツ』『浜千鳥』を思い出していたと推測できる。そして, 会話の間隙を見て思い出した歌を聴かせるように歌い出したのである (135 137)。D は, 合唱団で大会に行った C の話を受け, 継続して頑張ったことが良い結果へと繋がったと言いたげに, 「途中で投げたらいけん。続けにゃあいけん」と言っている (122 123)。「うちらあ(音楽療法参加者達)は, まだ教わりようよ」(130)「私らも頑張らにゃあいけん」(133)からは, これからも頑張っていていき, 学んでいこうとの意欲が見られる。C は『星影のワルツ』や『浜千鳥』を, 歌詞を見ずに歌うことができ, D は歌詞を思い出せなくても, C の歌に合わせて体を揺らして音楽に乗っていた (140)。D は C のことを気に入っているのと,

C の歌声が合わさり, 心地よく感じていたのだろう。『星影のワルツ』や『浜千鳥』は, 音楽療法でも年に 1, 2 回ずつ歌ってきた曲である。

5. E, F, G の語り

要約 10: E は子供の頃から歌が好きだった (2)。F によれば学校にオルガンはなかったが (6 7), 歌はレコードで覚えた (10)。当時, 各家庭には, 運べる蓄音機があった (28)。蓄音機やラジオを聴いて皆大きくなった (30) ので, 大体の流行歌を誰もが歌うことができていた (31)。

考察 10

西によると「日本放送協会による国民歌謡のラジオ定期放送は 1936 年に始まった」(2013) と言うが, 3 名は子供時代にその放送や蓄音機から流れる音楽等を聴いていたと考えられる。3 名は Y で出会ったが, 音楽療法やイベント, 食事の時間に会話し, 徐々に互いに自己開示してきたのであろう。E は子供の時から音楽が好きだったことを自覚している (2)。インタビュアーの問いかけから, 当時流行った歌や学校の音楽の時間を思い出した様子 (3 4 5 6 7) で, リーダーシップを取る E を中心に, 流行歌やレ

表 13. 語りの記述 11：流行歌を歌って怒られた思い出

E: [33]私は小学校の3年の時にな、初めて田舎にアドバルーンが上がったんじや。
 E: [34]私はあの時、3年生の級長をしようったから、止めにゃあいけなかったんじや。[35]それが、皆歌うしね。[36]窓の外にはアドバルーンが上がってるしね。G: [37]ははは。
 MT: [38]それで止められなかったんか。E: [39]それで皆で歌って女の子も男の子も。[40]その時は男女共学だったから。F: [41]あーそりゃ皆知っとるわ。E: [42]皆知っとるでしょう。[43]そこで歌うたんじや。F: [44]大合唱か。E: [45]そしたら、へへ。[46]先生が怒ってなあ。[47]女の先生じゃけどな。[48]3年生。[49]校長室へ行きましよう言うてわしの手を引っ張ってな。G: [50]ほほほほ E: [51]だーっと行ったんじや。
 MT: [52]それで、行ったらどうなったんですか。E: [53]すいません。[54]今日流行歌を歌いまして。[55]言うたら、校長先生がな。[56]ほう分かった分かった。[57]もう帰れ。[58]言うてやさしゅう言うてくれたんじや。
 MT: [59]よかったですねえ。E: [60]うん。[61]そしたら、その次の朝な、校長先生が朝礼台に立ってな。[62]朝礼の時に。F: [63]はいはい。E: [64]昨日生徒が流行歌を歌うたと。[65]ここでは絶対流行歌を歌うたらいけんぞと止められてなあ。
 MT: [66]大事件になったんじや。G: [67]ははは。E: [68]大事件もええとこじや。
 MT: [69]じゃけど今じゃったらあんまり考えられんけどね。E: [70]そうそう。
 MT: [71]そうか。[72]その当時は歌ったらいけんかったんですか。E: [73]昔は学校じゃ歌うちゃいけん言われとったん。[74]それを全員で歌うたもんじやけえなあ。[75]やられてなあ。[76]あっはっは。
 MT: [77]じゃけど、流行るとるもんじやったら歌いたいわなあ。F: [78]そりゃあーなあ。[79]レコード聞いたら、皆一生懸命覚えたん。
 MT: [80]そりゃあそうですねえ。[81]厳しいなあ。(中略) F: [82] (大きな声で) ♪空にゃ今日もアドバルーン♪やこう、ちょうど僕らの歳の。

コード、蓄音機へと話題が発展していく様子が見られる(10)。蓄音機の話から、あまり発言していなかったGが「ラップみたいなのやつ」と、会話に加わった(24)。Gは病気の影響でうまく言葉を発することができないことでこれまで会話には消極的だったにも関わらず、他の2人の話に自然にジェスチャーも含めて加わっている。このことは、本インタビューが気心の知れた仲間とリラックスした雰囲気の中での語り合いとなり、話の内容の懐かしさや楽しさによって、Gの発言が引き出されたと考えられる。また、他の2名にとっても、自身では思い出し得なかったことを互いに語り合うことで思い出し、更なる内容へと展開している(12, 17)。

要約 11: Eの小学校3年時のある日、アドバルーンが空に上がった(33)。それを見て、同クラスの友達が声を合わせてアドバルーンの歌を歌った(35)。Eは級長をしていたが(34)、当時学校で流行歌を歌ってはいけないという決まり(73)を守るべきだったのに一緒に歌ってしまった。担任の先生に校長室へ連れて行かれ(49)、強くは怒られなかったものの反省した(58)。そのことは大事件になった(68)。翌日の朝礼で校長先生は全校生徒に向けて「流行歌は歌わないように」と注意した(65)。Fはその話を聞き、「レコードを聴いて皆一生懸命覚えたん」と言った(79)。

考察 11

ここでは、再び語りの中心はEで、F、G、インタビューー共に聞き役になっている。

Eが小学校3年生の時、皆でアドバルーンの歌を

歌った思い出が鮮明に語られている(33)。この話題が出たのは、本インタビュー直前に行った音楽療法で、『あゝそれなのに』という歌を歌っていた(34)ため、現在90代であるEの小学校時代の思い出がその時の感情や感覚を伴って呼び起こされたと考えられる。当時、Eは級長であるにも関わらず(34)、皆の歌を止めず一緒に歌ってしまった(74)自身の行動を悔いていたが、今になっては歌を止めなかったことを昔の逸話として語っていた(75, 76)。反面、Fの言うように、懸命にレコードを聴いて覚えた歌を、声を合わせて歌った時は爽快な気分であったとも推測できる。しかし、そのことを担任の先生に叱られただけでなく(46, 47, 48)、校長先生までに話が届き(49, 55, 56, 57, 58)、結果、翌日の朝礼で全校生徒に向けて注意された時には級長としての責任を果たせなかった自身に対し、恥ずかしさや悔しさを感じただろう(64, 65, 66, 68)。このような強い感情をもたらししたエピソードは長い年月が経っても、鮮明に記憶に残っていると言える。そして、Eは、今回の語りでは、その時のやりきれない気持ちを、仲間達にも分かって欲しいという気持ちもあって話したと考えられる。Fは、学校で歌った話や当時学校での歌唱が禁止されていた話(73)を聞いて、皆でレコードを聴きながら曲を覚えたことを思い出し(79)、今も覚えていることが嬉しかったので、話題に上がった『あゝそれなのに』の歌を声高らかに歌い出したと考えられる(82)。

要約 12: 当時、流行歌の他に浪曲も流行り、寿々木米若や広沢虎造等の浪曲のヒーローがいた(86, 88)

表 14. 語りの記述 12：皆歌った浪曲や軍歌

E: [83]歌とかね。[84]浪曲とかね。 MT: [85]浪曲はどういうのがあるかな。E: [86]あれ、「寿々木米若」とかな。 MT: [87]寿々木米若？G: [88]寿々木米若っていう歌手があるん。F: [89]広沢虎造。G: [90]そうそう。F: [91]～石松（笑）。 MT: [92]さっぱりわからんけど。F: [93]その頃のヒーロー。 MT: [94]じゃあ、その人達の歌も皆さん歌える？F: [95]そりゃ歌える。E: [96]浪曲もなあ、歌えるしなあ。[97]みんなそれは学校でもやりようだったしな。 MT: [98]そんなら今もそういうのを浪曲とか歌ったらいいわね。G: [99]浪曲はここではやってない。 MT: [100]全然やってないもんね。G: [101]あんまり現実すぎて、慣れてしもうてな、よう覚えん。（中略）[102]軍歌とかね。 [103]『愛国行進曲』とか。EFG: [104]（3人声を合わせて）♪勝ってーくるさーといさまーしく一響あつてくーに出たからさーいいうてな。F: [105]兵隊さんが鉄砲を担いで行きようったのを送ったんじゃもの。（中略）【戦争の出来事】

[89][91][93]。Eは学校でも歌われていたので浪曲も歌える([96])。その他、軍歌も流行った([102][103])。『愛国行進曲』という曲名を聴いただけで、今でも3名一緒に歌える程である([104])。

考察 12

3名には年齢差はあるが、同じ話題で盛り上がることができ、各々そのことを喜んでいる。浪曲と聞くだけで「須々木米若」等の浪曲家の名前が出てきて([86][89][91])、軍歌の話へと話題が展開している([102][103])。やまだようこは「人はともに「うたう」ことで間柄をつくる存在である」(2010)と述べているが、3名がインタビュー内で自然に声を合わせ、一体感を持って『愛国行進曲』を歌ったこと([104])は、今まで共に時間を過ごし、音楽療法で一緒に歌ってきたことで築き上げた関係性から表れた行動であると言える。また、3名の語りは、認知症であるか否かではなく、各々が生きてきた証を共有し合うという相互行為となり、激動の時代を生き抜いてきた自負や懐かしみの気持ちが生起している。

IV. 全体の考察

本研究では、認知症者一人一人の語りに焦点を当て、対象者の当時の歌に関わる経験、気持ちや感情を明らかにすることを試みた。対象者である認知症者達は、歌についての問いかけから、過去に好きだった歌、ジャンル、音楽を通した自身の子供時代の思い出、母親、家庭、友達とのふれ合い方、学校での出来事や様子等、過去の出来事やその時の気持ちと、今音楽ができるという喜び、人との関係性についての話題を展開している。Aにとって歌に関する思い出の中での姉の存在は大きく、幼少期から歌が好きだった気持ちから過去の他者(姉)と自己との関わりを想起し、今歌えていることの喜びへと繋がって

いる。過去における他者と自己との関係性があり、外出しなくても歌うことができる環境への感謝の思いが表れ、今生かされている自己を認識している。Bは、小学校時代に独唱させられたことから、前施設でのカラオケ独唱での他者から褒められた経験を想起し、自身の歌声について自信をもっている。歌声への自信が歌うことの礎となり、今歌うことで主体的に自己を生きている。CやDは、自己と他者との関わりを通して、過去の歌の思い出と今歌えていることが繋がり、今いる友達や他者を思い認める気持ち、歌うことの喜びを表出し実感している。E、F、Gは、過去の歌の思い出の中から表出したキーワードから、一体となれる歌を、一人が歌い出すのに合わせて声高らかに歌い出している。今一緒にいる仲間、他者の存在を受容し、過去に覚えた歌や経験を共有し、今歌える喜びを分かち合っている。

また対象者は、記憶にある自己、他者との関わりにおける自己から、今ある自己やこれからの自己について考えている。言い換えると、自身の歌に関わる「その人らしい」生き方を振り返り、今その経験を語ることで、今歌に関わって存在していることを再確認している。つまり、自己を生成しているのである。小松(2013)は「認知症高齢者は認知症である前に高齢者であるという認識を明らかにすることを第一義とし、その基本的な理解の重要性、高齢者が認知症を患っているという視点でインタビューを行い、一般の高齢者として見ても差し支えないようなその人らしさが見える一面を見出したい」として認知症の感情表出に関するケアの研究を進めたが、本研究内でインタビューによって歌に対するその人の気持ちや考えを明らかにしていく際も、その人らしさが見える一面を引き出せるような問いかけを心掛けた。その結果、歌の話題から認知症者である対象者の多様な語りを引き出すことができた。ま

た、他者と共に語ることによって、他者に自身の思いを伝えよう、他者を分かろうとする語りの表出や相互行為が起り、個人だけでは表出し得なかった気持ちが生起し、これが言葉となって表出したと考えられる。さらには、個人と他者とが協働して語ることにより、歌に関する過去の経験への共通見解がその場で生成され、今ここにいるという事実と個々の生とが同期し、個々人が、生きてきたことの自己価値や喜びを見出している。

高齢者は、年を重ねるごとに気力や体力の衰えを自覚し、これまでの人生で培ってきた自尊心や誇りを失いがちである。今の自身を受け入れられず、不安になったり、焦りを感じたりする等、心の不調にもなりやすい。特に認知症者は自身の変化に戸惑い、より一層の心身の不調を感じていると考えられる。また、認知症には一般的に中核症状やBPSDが見られるように、進行するにつれて、思いを発信することが困難になる場合がある。それにより、認知症者の多くは、自身の変化や変化に対する周りの対応に多様な気持ちや感情を抱きながらも、それを声として発せられないまま、生きづらさを感じて生きていると考えられる。しかし、昨今、46歳で若年性認知症を発症したChristine Brydenの当事者運動(2017)で発せられているように、「認知症」というステレオタイプで認知症者と接するのではなく、認知症者が将来に必要とすることに注意を傾け、理解していくことが重要である。さらに、認知症者を含む高齢者は人生の先輩であり、「その一人ひとりの身体の中には、その人が生きてきた歴史と、その間に培ってきた知恵と意思がいっぱい詰まっている。私たちと同じように、昨日よりも今日、今日よりも明日、もっともっと成長しながら生きている」(六角, 2015)ことを念頭に置いて接していくことも意義あることである。今回筆者が実施したインタビューの場において、歌をきっかけに語り合い、記憶している懐かしい歌を歌うことは、自身の人生に気持ちを巡らせるだけでなく、他者の気持ちにも寄り添う時間となっている。懐かしい話で盛り上がる場の一体感、認知症者が日常の生きづらさをその瞬間忘れ、互いの存在を認め合うことにも繋がっていく。さらには、彼らが、今後の症状の進行に恐れを感じてい

たととしても、他者と時間を共有している瞬間は、自身が今生きていること、他者と共に生きていることに、何らかの意味を見出しているといえる。認知症者は、歌うことと歌に関わる語りを通して、「その人らしさ」を共有し、自己を生成しているといえるのではなかろうか。竹原(2013)は「私達は他者と共存している中で日常性を形成していますが、他者との関わりの中に日常性から脱した私達の存在の仕方があります」と述べているが、認知症者もまさにその通りといえる。

一方、本研究の課題は、認知機能の程度や病型等による症状の出方の詳細を明らかにできていなかったもので、それによる個人の語りの特徴までは考察できなかった点である。また、本研究では対象者から語りを引き出せたが、語りを取り上げる際、元々語るのが苦手な人、プライバシーを開示したくない人等がおり、そうした場合、認知症の有無に関わらず話題の展開が難しくなる場合があると考えられる。加えて本研究では、音楽療法参加者の語りを取り上げたことから、必然的に歌好きというバイアスがかかっている。音楽療法不参加者には、歌が不得意な人や自身の歌声へのコンプレックスを抱いている人がいることが予想できるので、仮に、音楽療法不参加者に同様の歌に関わる話題を提供していれば、話題の展開が難しく、自己の生成に至らなかった可能性が考えられる。さらに、本研究における対象者の事前情報は、対象者、家族、施設職員からの情報のみだった。インタビュアーが音楽療法の時間の前中後のみでなく、認知症者の日常の様子を観察することによっても、音楽療法以外の対象者に関する新たな気づきや情報を得られたらう。

本研究において、過去の歌唱活動に関する問いに対し、認知症者がどれだけ自己を語るのか、その語りをインタビュアーや対象者同士との相互行為の中でどのように展開していくのか、語りの記述を通して当事者の気持ちや感情等を考察できたことは、今までの研究にはあまり例のない成果であろう。

V. 結語

本研究のインタビューでは、対象者に向けて歌を

好きになったきっかけを問うことから、語りを展開していった。インタビュアーは対象者の語りが続くように開かれた質問を心がけ、語りは、他者の発言が加わることで更に別のキーワードが出現する等して発展していった。つまり、インタビュアーと対象者及び対象者同士の会話は、語りを通した他者との関わりという相互行為へと発展した。また、グループインタビューでは、対象者である認知症者達は互いが認知症者であることを知らなかったが、会話を通して互いに仲間意識を抱いていった。本研究の語りに登場した音楽は、映画音楽、童謡、民謡、流行歌、軍歌と多様であり、偏りはあるもののあらゆる音楽を楽しんでいたと考える。テレビやインターネットの普及と発達により世界中の情報を得られ、音楽の好みが多様化している現代と比較すると、当時は、ラジオ、映画、LPから流れる音楽が主流で、音楽の選択肢は少なかった。しかし、そのような時代だからこそ、歌を楽しむことが同世代を生きる者に共有されていたとも考えられる。

今回は認知症者7名の語りを取り上げたが、インタビュアーは、語りが展開していくうちに、対象者の言葉の端々から見える一個人の生きてきた時代背景、人間味、人間性に触れることで、対象者が認知症者であるか否かではなく、自身の生き方、他者との関わり、過去、未来について考え直す機会を得られた。現に、歌に関する語りは一つのきっかけに過ぎず、そこから時代背景やその時の考え、夢中になったことが語りという形で展開していったからである。今後も多種多様な高齢者の歌唱について研究を継続していく方針である。

謝辞

本稿作成にあたり研究協力者及び施設関係者の皆様には多くのご協力を賜りました。心より御礼申し上げます。

引用文献

阿部真貴子・佐藤正之・田部井賢一・川北澄枝・藤田梨紗・中野千鶴・木田博隆・冨本秀和 (2015). 認知症患者及

- びその介護者への音楽療法の効果判定：介護負担感への影響. *音楽医療研究*, 8 (1), 18-26.
- Bryden, C. (2015). *Nothing about us, without us!*. London: Jessica Kingsley Publishers. (ブライデン, C. 馬籠久美子 (訳) (2017). *認知症とともに生きる私 - 「絶望」を「希望」に変えた20年*. (pp.259-262) 大月書店).
- 榎本博明 (1999). 「自己」の心理学 - 自分探しへの誘い - (pp.8-9) サイエンス社
- Frey, J. H., Fontana, A. (1991). *The group interview in social research. The social Science Journal*, 28 (2), 175-187.
- 畑野相子・筒井裕子 (2006). 認知症高齢者の自己効力感が高まる過程の分析とその支援. *人間看護学研究*, 4, 47-61.
- 服部紀子・安藤邑恵・中里知広・池田沙矢香・青木律子 (2011). 介護老人施設で暮らす軽度認知症高齢者の日常での経験. *横浜看護学雑誌*, 4 (1), 63-70.
- 林真帆 (2012). 認知症高齢者の世界観：「時間」と「空間」の視点から：. *別府大学紀要*, 53, 87-95.
- 東村知子 (2012). 母親が語る障害のある人々の就労と自立 - 語りの形式とずれの分析. *質的心理学研究*, 11, 136-155.
- 出井訓, 分担執筆者六角僚子 (2015). 認知症と生きる (pp.95-110) 放送大学教育振興会
- 梶田毅一・溝上慎一 (2012). 自己の心理学を学ぶ人のために (p.132) 世界思想社
- 加藤泰子・高山成子・沼本教子 (2014). レビー小体型認知症の高齢者が語る生活上の困難な体験と思い. *日本看護研究学会雑誌*, 37 (5), 23-33.
- Käll, L. F.・青木健太・浜渦辰二 (2015). 単なる喪失ではない：加齢に伴う認知症における自己のあり方. *臨床哲学*, 16, 82-109.
- Kidwood, T. (1997). *Dementia reconsidered the person comes first*. Philadelphia: Open University Press. (キッドウッド, T. 高橋誠一 (訳) (2005). *認知症のパーソンセンタードケア - 新しいケアの文化へ -* (pp.19-20) 筒井書房)
- Koger, S. M., Chapin, K., Brotons, M. (1999). Is Music Therapy an Effective Intervention for Dementia? A Meta-Analytic Review of Literature. *Journal of Music Therapy*, 2-15.
- 小原依子・前田潔・中澤清 (2013). 認知症等の高齢者を対象とした音楽療法の効果に関する実践的研究：チェックリスト (MTCL-YK (S)) の開発及び音楽療法の短期効果・長期効果を中心に. *神戸女子大学文学部紀要*, 46, 83-97.
- 小松一子 (2013). 認知症高齢者の感情表出とケアへの示唆 (p.33) ウィンカもがわ
- 厚生労働省 2017 平成 28 年介護サービス施設・事業所調査の概況 http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kaigo/service16/dl/kekka-gaiyou_05.pdf (2017 年 11

- 月1日)
 厚生労働省 認知症サポーターとは <http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000089508.html>
 (2017年1月7日)
 厚生労働省 2014年11月19日版認知症施策の現状について http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000065682.pdf (2017年8月2日)
 厚生労働省 地域包括ケアシステム <http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12600000-Seisakutoukatsukan/0000061858.pdf> (2018年3月1日)
 栗田京子・徳永恵子・松壽勝他 (2014). 認知症対応デイケアでの音楽療法“栗田メソッド”の実施継続による効果: MMSE 評価と NAT 測定からみた仮性鬱病性認知症患者における1年後の効果. *日本早期認知症学会*, 7(1), 96-100.
 Mead, G. H. (1934). Mind, self, and society: From the standpoint of a social behaviorist. *The University of Chicago Press*
 森祥子・木室ゆかり (2014). 周辺症状の見られる認知症高齢者における音楽的介入の効果: グループホームに住する気分変動や攻撃的行動がある1事例の検討. *自立支援介護学*, 7(2), 130-138.
 無藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サトウタツヤ (2004). 質的心理学 創造的に活用するコツ. (p.156) 新曜社
 内閣府平成28年版高齢社会白書(概要)
http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/html/gaiyou/s1_2_3.html (2017年8月7日)
 Neisser, U. G. (1993). The self perceived. In U. Neisser (ED) *The perceived self: Ecological and interpersonal sources of self-knowledge*. *Cambridge University Press*, 3-21.
 西村健・播口之朗 (1984). 痴呆の診かた. *臨床のあゆみ*, 4, 4.
 西仙閣 (2013). 私の少年期 歌との出会い「国民歌」を中心に (p.8) 橋本確文堂
 緒方泉 (2009). 認知症高齢者が語り描く生活体験 - 集団回想描画法を用いた事例研究. *生活体験学習研究*, 9, 1-11.
 沖中由美 (2006). 身体障害とともに老いを生きる施設入所高齢者の自己意識. *日本看護科学会誌*, 26(4), 19-29.
 沖中由美 (2011). 在宅で老いを生きる要介護高齢者の自己意識. *日本看護学会雑誌*, 34(2), 119-129.
 太田有希, 井上健 (2009). 高齢者及び認知症患者に感情表出を促す回想法の効果について. *人文論求*, 58(4), 59-69.
 佐々木和佳・内田達二・村田康子他 (2013). 第9回プロジェクト研究論文 認知症高齢者への音楽療法の有効性に関する研究: Dementia Care Mapping を用いた評価・分析. *日本音楽療法学会誌*, 13(2), 94-102.
 白井はる奈・藤原瑞穂・宮口英樹・宮前珠子 (2005). 重度認知症高齢者の(笑)・笑顔表出に関する探索的研究. *作業療法*, 24(3), 253-261.
 Sung, Huei-Chuan, Chang, A. M., Lee, Wen-Li (2010). A preferred music listening intervention to reduce anxiety in older adults with dementia in nursing homes. *Journal of Clinical Nursing*, 19, 1056-1064.
 高田艶子・岩永誠 (2014) 補完代替医療としての音楽療法が認知症に及ぼす効果. *日本補完代替医療学会誌*, 11(1), 49-55.
 竹原弘 (2013). 人生論. (p.125) 現代図書
 田中元基 (2014). 認知症高齢者はどのように同じ話を繰り返すのか - ループする物語の事例研究. *質的心理学研究*, 13, 84-98.
 田中元基・大橋靖史 (2016). 認知症高齢者による場所の見当識障害にかかわる現象の捉え直し: 場所についての語りのディスコース分析. *老年社会科学*, 38, 84-93.
 戸田由利亜・谷本真理子・正木治恵 (2017). 他者と共に在る認知症高齢者の表現する姿. *千葉看護学会会誌*, 22(2), 1-10.
 やまだようこ (2010). ことばの前のことば うたうコミュニケーション (p.53) 新曜社
 (2017. 9. 16 受稿) (2018. 4. 27 受理)
 (ホームページ掲載 2018年6月)